



## サケの子どもを、春に川へ放流するのはなぜ

### サケをたくさん大きくするため

サケは、春に川で卵からかえって、体長が5～7センチメートルになるまで育ってから、川を下って海に出ます。北の海で、3～5年間、アミや、ほかの魚などを食べて、卵が産めるまで十分育ったら、生まれた川を探して、卵を産みに帰ってきます。

日本の川は、サケが卵を産むのにつごうのよい川底が少なく、また、卵や、卵からかえった子魚は、水生こん虫やほかの魚などのえさになるので、ぶじに海に下るまで大きくなれるサケの数は、大変少ないものです。そのため、いちばん弱くて、生き残る割合が少ない時期に、人間が手助けしています。少しでも、大きなサケになって帰ってくる数が増えるように、サケの子どもを、人の手で育ててから、春に川に放流するのです。

### 自然の中のサケの育ち方

川底の穴に産みつけられたサケの卵は、およそ60日くらいでかえり、おなかに大きな卵黄をつけた赤ちゃんが出てきます。まだ、自分でえさをとることはできないため、石の下などにかくれ、おなかの卵黄の栄養で育っていきます。およそ50日後に、3.5センチメートルぐらいまで育ったサケの子魚は、ミジンコ、ユスリカの幼虫、水生こん虫の幼虫などのえさを食べて大きくなっていき、海に下る時期が来たら、いっせいに川を下ります。

### サケの養殖場では何をするの

人間は、産卵のために川へ上ってきたサケをとらえ、卵をしぼり出し、オスの精子（オスの体質や性質を伝えるもの）をふりかけ、ふ化器で卵をかえします。卵からかえった子魚を、体長が5～6センチメートル（海に下れる大きさ）になるまで、えさをあたえて育てます。この子魚を、春に放流します。（監修・安部 義孝）

